



ままごとコーナーで遊んだ友達みんなと「いただきます。」



テーブルいっぱいになった料理



「ゆでたまごです。」
「もう、茹でであるので食べられます。」



『ケーキは、できたかな?』



『先生は、ケーキが好きかな。
ケーキは、卵を混ぜて…』



「先生、お料理食べて!」

(幼児の実態)

協力園
大分明星幼稚園

3歳児の2月、自分の好きな遊びの中で、気の合う友達と簡単な言葉のやり取りや遊び方の真似をしながら、友達と関わって遊ぶ姿が見られるようになってきました。
自分のイメージしている遊び方で、一人黙々と遊ぶA児がいます。保育者は、A児が友達と同じ場で遊ぶことを楽しいと感じられるように、A児の好きな遊びの『ままごと』コーナーを設置しました。

保育者は、好きな遊びをする前に「昨日の続きをしようね。」と、昨日の遊びを思い起こさせました。話が終わると、子どもたちは、楽しそうに保育者とテーブルを出したり、ハサミやガムテープ等の遊びに必要な材料を準備したりして遊びの場を作っていました。

A児は、すぐに『ままごと』コーナーに行き、フライパンとおもちのスパゲティ、フライ返し、こしょうの容器をキッチンに持ち込みました。A児は、まず、フライパンをコンロにかけ、フライ返しを使ってスパゲティを動かします。次に、流してスパゲティが落ちないようにフライパンを傾け、湯切りをしているような動作をしました。A児は、スパゲティを作る過程を再現するという『ままごと』遊びをしているように見えます。

湯切りが終わり、味付けです。スパゲティをフライパンで炒めていると、友達がキッチンにあるこしょうの容器をおうと手を伸ばすと、A児はすかさず「だめ!」と言いました。友達は、困った表情をして他の遊びに行ってしまうましたが、A児は料理に夢中で気付きません。互いの思いや考えは、言えないままです。

A児は、出来上がったスパゲティを皿に盛り付け、キッチンの奥のテーブルに持っていききました。テーブルに料理を置くと、白いホーロー鍋を見つめます。鍋を使っていた友達に「貸して。」と言うと、友達は「いいよ。」と答えてくれました。A児は、ホッとした表情になり、箱の中からケーキと卵のおもちを取り出し、貸してもらった鍋に入れてキッチンに持ってきました。丁度その時、保育者が他の遊びから、『ままごと』遊びの場に来て来て、テーブルに並んだ料理を見ると「まあ、沢山。」と驚きます。保育者は、料理を運んできた友達には「おいしいね。」と、話しながら食べ始めました。

A児は、保育者を見ながら、鍋の中に入れてたケーキと卵を泡立て器で混ぜて、四角の皿にケーキを乗せ、オーブンに入れてダイヤルを回します。少し間を置き、オーブンを覗き込んでケーキを取り出し皿に移して、焼きたてのケーキを保育者に持って行きました。保育者は「ああ、おいしい。」と、A児を見ながら答えました。

それから、料理を作る過程をきちんと経て、できた料理を保育者に持っていきますが、お目当ての保育者が友達と話していると、「(次は)〇〇先生」と近くにいる保育者の名前を呟きながら、自分の料理を運びます。その保育者が友達と話していると、また、違う保育者を見つけようとしていました。園長先生が近くに来ると、A児は黙って作ったものを差し出しました。園長先生が「これは、何ですか?」と、A児に聞くと、「ゆで卵です。」「もう、茹でであるので、食べられます。」と、丁寧に答えました。園長先生が、「ありがとう。」と、受け取ると、A児は、大きく頷き、キッチンに戻って料理を作り始めました。A児は、作る過程を楽しみながらできた料理をテーブルに運ぶことを繰り返します。食べてくれる保育者がいなくなくなり、テーブルが料理でいっぱいになりました。

保育者が、他の遊びの場から戻って来ました。「いっぱい、お料理が並んでいるね。みんなで食べよう!」と、ままごと遊びをしていた子どもたちに声をかけました。すると、A児と友達3人が集まりました。保育者が椅子に座ることを促すと、子どもたちは、テーブルに丁度いい高さのスポンジ積木を持ち込み、好きな場所に座りました。保育者の隣の子どもが話し始めると、保育者は「そう。」と相槌を打ちながら聞いています。A児も、友達を見ながらその話を聞いています。一人は「お茶、どうぞ。」と、全員のコップに急須でお茶を注ぎ、まるで、一家団欒の風景を見ているようです。

片付けの時間になりました。「お皿ちょうだい。」と、お茶を注いだ子どもがキッチンから声をかけました。A児は、おもちの食べ物箱に入れて、「はい!」と言いつつキッチンにいる友達に皿を手渡して、友達と一緒に遊んだ場をきれいにしていきました。

大好きな遊びをする中で、次第に遊び方を共有し、一緒に遊ぶ心地よさを感じるようになってきている子どもたち。この子どもたちが、必要な経験を重ねながら、友達と気持ちを通わせ、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになることを期待します。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 「10の姿」

- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 豊かな感性と表現
- 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

事例から見られる10の育ち

言葉による伝え合い

A児は、料理を作る人になりきって遊ぶことで、相手に応じた言葉の使い方をしたり、聞かれたことに対して相手が分かるように丁寧に答えたりもしていた。また、友達と同じ場で遊ぶことで、自分の要求を言葉で伝えたり、友達の話や意見を聞き、行動を共有しながら一緒に遊ぶ体験をした。思いが伝わる心地よさや、一緒に遊ぶためには言葉を使う必要があることを実感していったと思われる。

このような体験を重ねていくことで、5歳の終わり頃には、友達と心を通わせ、相手に分かるように話したり聞いたりする等、言葉による伝え合いを楽しみながら友達と遊べるようになると思われる。

事例から見られる10の育ち

豊かな感性と表現

A児は、キッチンやおもちの食べ物からイメージをもち、以前見たことのある料理人になりきって、自分なりの表現を楽しんでいたと思われる。また、保育者が遊びに参加し、楽しんでいる姿を見ることが、一人の表現から、相手を考えてながら表現することにつながったのではないかと考えられる。表現を意識した相手から認められ、さらに表現しようとする意欲につながったと考える。

心を動かし感性を働かせる経験を重ねながら、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、5歳の終わり頃には、感じたことや考えたことを表現したり、友達と表現する過程を楽しんだりする姿になっていくと思われる。

保育者の援助・環境構成のポイント

- 役になりきって遊ぶための環境
 - イメージがわくような『ままごと』コーナー (キッチン・おもちゃの食べ物・皿・調理器具・作った料理を並べられるテーブル 等)
 - 遊びの一員として楽しむ保育者の存在
- 伝えたい気持ちを促すための援助
 - 子どもの伝えたいことを汲み取り、引き出すような声かけ
 - 子どもが言葉で伝えたいときに、受け入れてくれる相手の存在
 - 友達と行動を共有できる場の設定 (子どもが好きな遊びができるコーナーの設置・食事をするとイメージがわきやすい場の設定)